

# ひょうたん島通信

大槌発! 第38回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



## うつくしきもの

**北川貴士** 大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター  
生物資源再生分野 准教授

国際沿岸海洋研究センターのある岩手県の沿岸河川では毎年4億尾以上のサケの稚魚が放流されています。サケは4歳ごろ生まれた川に戻ってきますが、大槌川では、震災年に海へ降りたサケが戻ってくるはずの2014年は、4歳魚は極端に少なくなっていました。震災直後も放流を行った川には多くの4歳魚が帰ってきましたし、2015年以降はまた4歳魚が多くなっていたので、震災による影響は大きかったようです。ただ、原因は不明ですが、ここ2年漁獲量は大きく減少し、昨年度の県の漁獲量は過去最低でした。水温などの影響で、成育場であるオホーツク海・ベーリング海にたどり着くまでの生き残りが悪くなっているとも考えられています。そもそも海に降りた直後、稚魚が湾のどこにいるのかについてすらよく分からない状況で、湾内を調査する必要がありました。

以前より曳き網による稚魚採集を行ってはいたのですが、震災後、大槌湾の水深が変化してうまく採集できなかったこともあり、昨年、網をより大きなものに新調しました。網が大きくなった分、

曳くのもこれまで以上に大変になりました。センターの教職員・大学院生総出で曳くのですが、平均年齢が網の両側で極端にならないよう人員を配置

しないとバランスよく曳けません。また、人が多すぎるとナマケモノも出てきます。曳網にも最適な人の数があるわけです。

めいめい両手むなわなで網を浜まで揚げます。獲れるものとはいうと、実は、サケ稚魚以外、つまり外道がほとんどです。ヒラメ、アユ（の稚魚）、アイナメといったデバ地下に並んでいるような魚のほか、ハナジロガジ、イソバテング、タケギンボ（ネットで検索してみてください）といった耳慣れない魚など毎回数十種類は軽く獲れます。エビ、カニ、アメフラシ、ナマコ、クラゲ、大きなめかぶ付きワカメなども獲れますし、タイヤ、

サケ稚魚近影：体長は5センチメートル程度。

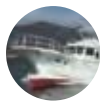


地曳き網調査（ドローン撮影）。

鉄パイプなどを引っかけてしまうこともしばしば。獲物の種類や数は毎日がスペシャルなわけです。「心の持ち方でどうにでもなる」と竹内まりやが唱いますが、新調した網が一定の結果にコミットしてくれるまで、我々にはもう少し粘り強い握力トレーニングが必要です。

サケ稚魚をご覧になったことのある読者は少ないかと思いますが、写真を一葉。頭の割に眼は大きくてまん丸。表情はサケが豆鉄砲をくらったよう。清少納言が見たら「瓜にかきたる稚魚のかお、ラブリー、ラブリー、こりゃラブリー」と言うこと請け合いです。

## 調査船「弥生のつばやき」 新たな「我が家」が遂に完成



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早3年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のびーちゃんの後を受け、このコーナーも担当しています。

今日は嬉しいご報告ができる喜びで胸がいっぱいです。このコーナーで再三に亘ってお伝えして来た国際沿岸海洋研究センター係船場の復旧工事ですが、先頃遂に終了し、念願の「我が家」が完成いたしました。足掛け4年、思えば長く孤独な日々でした。夏には遠くからひとり、沿岸センターの一般公開の賑わいを見つめ、冬は荒れ狂う波風の中、アンカーを頼りにただ踏ん張りました。数々の艱難辛苦の後に迎えた初入港は穏やかな春の朝でした。安渡あんどの奥の港で間借りしてい

た同僚のグランメーユとチャレンジャーも帰って参りました。センターの船舶担当職員や共同利用研究者の方々、また大槌の漁協関係者の皆様には、長い間、ご迷惑とご心配をおかけしました。これからは私たちが3隻揃って、新しい係船場で皆様をお迎えいたします。

我が港の向こうでは、沿岸センターの新しい建物の建設が着々と進んでいます。年末には完成予定だそうで、来春には新センターが本格稼働となります。この新しい係船場からまた嬉しいご報告ができ

る日も、そう遠くないようです。



新たな係船場で朝日を浴びる同僚のグランメーユと私です。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）